



矢巾新病院完成予想図(概観)

主陵會々報

発行所
岩手医科大学主陵会
盛岡市内丸19の1
Tel 019(651)5111番
Fax 019(624)8380番
E-mail:info@keiryokai.gr.jp
URL http://www.keiryokai.gr.jp
題字 三田定則先生書
発行人 石川育成
編集 前沢千早
印刷所 山口北州印刷

7 月 号

目 次

創立一二〇周年記念事業	1
大学役職者就任ご挨拶	2
教授就任のご挨拶	9
最終講義	13
平成二十七年度入学者	15
歯学部卒業奨励奨学生表彰式	16
平成二十八年年度入試概要	18
創立一二〇周年記念イベント	18
「健康フェス2015」	35
科学研究費申請・採択状況	21
主陵会本部だより	21
医学部同窓会だより	25
歯学部同窓会だより	29
FAXニュース	34
石川育成先生第一回山上の光賞受賞表彰の栄誉	35
大学人事	37
ご逝去・お祝い・編集後記	38

岩手医科大学創立一二〇周年記念事業

I. 創立年の取扱及び記念事業

これまで昭和三年の岩手医学専門学校設立許可をもってあててきた学校法人岩手医科大学の創立年については、明治三十年四月二十日に私立岩手病院を開設した際に医学講習所が併置され、医師養成にあたっていたことが確認されたことを踏まえ、創立年を明治三十年に改め、総合移転整備計画も包括した創立一二〇周年記念事業を実施することとなりました。大学の益々の発展のために、主陵会員の皆様の絶大なご理解とご支援をお願いいたします。

II. 創立一二〇周年記念事業

- 矢巾新附属病院建設
- 内丸メデイカルセンター(仮称)建設
- 看護学部の新設(予定)
- 記念式典・祝賀会開催(平成二十九年四月二十日(木))
- 記念イベントの開催(健康フェス開催…18頁に掲載)
- 教育研究環境の充実
- 歴史資料の整備

III. 創立一二〇周年記念事業募金

募金要項

- 募 金 名 岩手医科大学創立一二〇周年記念事業募金
- 募金目標額 五十億円
- 募集期間 平成二十六年六月〜平成三十一年五月
- 口 数 個人一口一万円 法人・団体一口十万円
- (一口未満のご寄付につきましても有り難くお受けいたします。)
- 募金の手続き方法(募金状況は33頁に掲載)
(「寄付申込書」等は大学の創立一二〇周年記念事業事務室にご請求ください。)
- 募金の種類
 - (1)個人対象(特定公益増進法人に対する寄付金)
 - 税法上の優遇措置があります。
 - ご寄付の累計額に応じて、顕彰をいたします。
 - (2)法人対象(受配者指定寄付金・特定公益増進法人に対する寄付金)



副学長(歯学部改革担当)就任のご挨拶

副学長・歯学部長 口腔医学講座歯科医学教育学分野

教授 三浦 廣行

平成十年七月に、教授歯学部歯科矯正学講座担当(現口腔保健成学講座歯科矯正学分野)に就任し、本年三月に定年退職するまでの間に、歯学部長、歯学部附属病院長、岩手医科大学附属病院副院長(歯科医療センター長)、歯科医師卒後臨床研修センター長、総合歯科臨床教育センター長、岩手歯科技工専門学校校長、歯科衛生専門学校校長、医療専門学校校長を務めてまいりました。また主陵会に於きましては、副幹事長、幹事長、副会長として会務を進める上で多くの先生方からご指導ならびにご協力を戴きました事に感謝申し上げます。

この度、四月一日付で、副学長(歯学部改革担当)兼歯学部長、口腔医学講座歯科医学教育学分野教授に任ぜられ、これまでに責任の重さを身に沁みて感じているところで、

歯学部では、平成二十三年に始まりました改革プロジェクトが四年目を迎えました。本プロジェクトは、小川理事長学長の陣頭指揮により、永井成美(米田ハワード大学准教授)学長顧問の協力のもと、新しい教育・臨床・研究・国際地域医療協力システムを構築するため、理事会直属の歯学部改革プロジェクト実行委員会を組織し、プロジェクトの企画、立案、推進、評価等について審議してきました。また本プロジェクトはハワード大学と正式な覚書を締結(平成二十三年十二月十五日)し、ハワード大学の教育システムの概念と形式を導入し、本学歯学部独自の新しい教育システムを構築することによって、教育、臨床、研究における将来のリーダーを育成することを目指しています。本実行委員会の実践組織として、教育・臨床・研究等に於ける具体的な計画を立案し、実行委員会の決定に基づき実務を実践する専門部会(歯学教育部門、歯科臨床部門、歯科医学研究部門、国際地域医療協力部門)を設置し活動を行っており、本プロジェクトの具体的な目的は以下のとおりです。

一、国家試験の合格率を上げること
二、入学志願者を増やし、入学者の競争率を上げるこ

と、また卒業率を上げること
三、学生の満足度を上げること
四、教員の満足度を上げること
五、卒業生の満足度(トライド)を上げること
これらの目的を達成するために次の五つの戦略を掲げました。

一、歯学教育部門(ODE)、歯科臨床部門(OCA)、歯科医学研究部門(ODR)の設立
二、講座再編および新しいプロモーション制度の設立
三、新しいカリキュラムの編成
四、学生外来(OCC)の設立
五、歯科医療センターの再編と最新歯科医療の導入
さらに、本プロジェクトでは、教育改革のひとつとして、以下の目的を実践するために、Social制度とSenior Tutor制度を立ち上げました。

一、総合的な学生教育
二、学生が親しみやすい学習環境の構築
三、これまでのクラス単位での学生の交流に加えて、学年縦割りの交流による学生同士が支え合える環境作り
四、Real timeで教育システムと教員の問題点を把握し、Real timeで教育システムと教員の問題点を把握し、フィードバックできること

この制度を活用することで、学生と教員および学生同士の意志疎通を円滑にし、学習への取り組みや卒業後の進路など、学生生活の様々な問題をタイムリーに解決してゆくことが可能となりました。

各のCenterは、一～六年の各学年十名程度でグループを形成し、各Societyには三～四名の担当教員(Tutor)を配置して採用します。

この制度の採用によって、学生間では、屋根瓦方式の教育システムとして「教学半」が実践でき、また教員との間では「啜啄同時」を実践しやすくする場をつくることとなります。これを実現するために、歯学部五階の基礎講座転移後の研究室等を、六年の学習室、五年の学習

室、一～四年の学習室を兼ねたミーティングルーム、Tutorの個室として活用しています。

一方、カリキュラムに関しては、診療参加型の臨床実習を充実するために、大幅な変更を行いました。このカリキュラムの変更に合わせて、より診療参加型臨床実習を実施しやすい環境とするために、歯科医療センター外来の再編を行いました。とくに臨床実習生が指導医の指導のもとに診療グループの一員として歯科診療に携わる学生外来として、先進総合歯科外来(Comprehensive Care Clinic: OCC)を設置し平成二十四年五月より稼働しています。

研究に関しては、大学の活力の源として重要なものとしてプロジェクトの中で位置づけており、研究組織の在り方、大学院生の研究指導体制、大学院修了後の研究体制等について検討を進め一部実行に移しております。

本プロジェクトがスタートして三年が経過しました。この間、ハワード大学の教員による学生講義やセミナー、臨床フォーラム等も行なわれております。さらに臨床実習の一環として本学学生がハワード大学で実習を行なうとともに、ハワード大学の学生も本学で実習を体験しております。また歯学部教員、看護師、歯科衛生士がハワード大学での研修に渡航しております。これらハワード大学との研修等に於きましては、主陵会の皆様からご援助を戴いております事に感謝申し上げます。

先に掲げた目的は着実に達成されつつありますが、これからさらに実施していかなければならない点、まだまだ改善すべき点、見直しを掛けなければならない点等が山積しています。本プロジェクトは歯学部の教職員と学生が一丸となつて取り組んでいるものです。とくに若い教員の改革に取り組み熱意と企画力、実行力、そして経験豊富な教員のサポートによって歯学部は好転しつつあります。歯学部はこの熱い想いをバネに今後さらに飛躍できるものと確信しています。

今後とも主陵会の皆様のご指導とご支援をお願いいたします。



附属花巻温泉病院長就任のご挨拶

医学部整形外科学講座 教授 一戸 貞文

梅雨の候、主陵会の諸先生には益々ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

この度、医学部教授会のご推薦をいただき、理事会のご承認を経て四月一日より附属花巻温泉病院長を拝命いたしました。看護学部の増設が決まり、岩手医科大学総合移転計画の工事が進むこの時期に附属花巻温泉病院の舵取りを担うこととなり、その重責に身の引きしまる思いしております。

猪又前病院長の下で一年間と短い期間ではありましたが、副院長として貴重な経験をさせていただきました。猪又先生の方針を引き継ぎ、できるかぎり地域医療に貢献することを目指していきたいと考えております。

附属花巻温泉病院をご存知でない先生もいらっしゃるかと存じますので、当院の概要を簡単に説明いたします。当院は花巻市の西側、台温泉と花巻温泉郷の中間に位置しております。ちなみに、台温泉は六〇〇年前開湯とされ、花巻温泉郷は大正十二年の営業開始であります。山の中に位置することもあり病院の周囲には熊が出没いたします。また雄が飛び込んできたこともございました。当院は戦前に傷痍軍人花巻温泉病院として設立され、戦後国立療養所花巻温泉病院として運用されてきました。私自身、入局二年目を当院で研修を受けた思い出がございます。一九八六年に制定された国立病院・療養所の再編

計画により国立療養所花巻温泉病院は一九九三年に国立花巻南病院と統合され、建物は岩手医科大学に譲渡となり一九九三年五月から岩手医科大学附属花巻温泉として開院しております。旧リハビリ施設に外来部門が増設され、旧外来部門は臨床検査室に、リハビリ棟は敷地内に新設されました。旧国立療養所花巻温泉病院の建物の下は川が流れており、三・一一の東日本大震災にも耐えて現在に至っております。しかし施設・設備は老朽化しており、今年五月十三日の余震では四階病棟の壁が一部崩れる被害が出ております。診療機器も老朽化が進み、MRI装置のダウンが心配されています。

大学附属病院ではありますが病床数は一五〇床(稼働病床数一三八床)、職員は一三三名と規模は大きくありません。しかしながら、温泉施設を利用したりリハビリ棟をもち、急性期からリハビリまで一貫した治療を行える数少ない病院であります。

二階は内科と外科の病棟、三階は整形外科の病棟、四階は特殊病棟として難治性神経疾患や脊髄損傷患者さんなど長期入院が必要な患者さんの病棟となっております。常勤医師は内科三名、神経内科一名、外科一名、整形外科三名、麻酔科一名であります。本年四月より常勤内科一名は本院内科各講座から一〜三カ月交代の派遣となっております。昨年と比べて循環器内科一名、外科一名の人数減となり、やや

マンパワーが不足していることは否めません。

開設当初は附属病院の後送施設としての役割が大きかったと存じますが、現在では比較的高度な専門性を持つ地域医療の拠点病院としての位置づけが浸透し、花巻市内はもとより沿岸、一関方面からも患者さんが来院される状況となっております。大学に籍を置いている場合、いきおい専門領域に偏りがちな傾向が出てまいります。しかし、地域医療にあつては幅広くその患者さんに対応ができません。現在の一流の医療を提供することは困難であり、幸い、本院との交流、常勤医の出身教室のご援助とご指導により今まで大過なく診療を続けており、応援をいただいている本院の各講座には深く感謝申し上げます。

スタッフの頑張りもあり、リハビリでは癌リハビリの認定施設を昨年取得し、医療安全二の加算も今年から取得できました。検査室は検査精度が高いとこのことで表彰を受けております。以上、当院の置かれた立場をわきまえながら高度な専門性を持った地域医療をめざして診療にあたっていく所存でございます。

最後になりましたが、主陵会諸先生方のご助言とご支援をよろしくお願い申しあげ、ご挨拶とさせていただきます。

教授就任のご挨拶

平成二十七年四月一日付



医学部臨床遺伝学

教授 福 島 明 宗

主陵会の皆様方におかれましては、ますますご健勝のことと心よりお慶び申し上げます。このたび、平成二十七年四月一日付をもちまして、岩手医科大学医学部臨床遺伝学部の初代教授を拝命いたしました。本学は本学における遺伝医療の要となるべく平成二十三年七月一日に新設されておりました。主陵会の皆様方には既に多大なご支援を賜っており、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

私は北海道札幌市に生まれ、福島県立福島高等学校を経て本学に入学いたしました。卒業後は直ちに産婦人科学講座(西谷巖名誉教授)に入局いたしました。諸先輩方のご指導の下、附属病院および関連病院において数多くの分娩を取り扱い、また多種多様な産婦人科疾患の診療に従事し、臨床における基本姿勢を学ばせていただきました。臨床家としての自分はこの時期に形成されたものと感謝いたしております。この間、本学大学院では医学部生化学講座(小野繁名誉学長)において研究の基礎を一から学ばせていただきました。「正常子宮内膜における細胞周期とsteroid hormone receptor変動との相関」のテーマで学位を取得いたしました。当時はフローサイトメーター(FCM)を用いた細胞計量学およびFISH(Fluorescence *in situ* hybridization)が盛んに行われて

いた時代であり、産婦人科学講座にお

いても婦人科がんを中心に、これらを用

いた臨床研究が盛んに行われておりました。

私は当時注目され始めていた「妊婦母体

血中における胎児由来細胞」による非侵

襲的出生前診断法を研究すべく、平成四

年から約二年間、当時ECM研究のメッカ

であった米国ニューメキシコ州立大学へ

訪問研究員として留学する機会を得るこ

とが出来ました。留学先では研究に携わ

る一方で、米国の産科臨床の現場を見聞

することが出来ました。帰国後はECM、

FISHに加え、新たに米国で取得した磁気

細胞分離システム(MACS)およびPCR

の技術を加えて継続的に同テーマでの研

究に取り組みことになりました。また同

テーマでの大学院生の研究指導や論文作

成も行うことが出来ました。

さて平成十三年四月における岩手県総

合周産期母子医療センター母体胎児治療

部門(MFICU)開設および岩手県周産期

医療情報ネットワークの構築、運営にあ

たりましては、この大事業に実働責任者

として関わる事ができ、これらの経験

も私の貴重な財産になっております。こ

の後しばらくはMFICUにて周産期医療

に邁進して参りましたが、同時に遺伝学

的な側面を含めた、胎児の非侵襲的出生

前診断検査法の研究も継続して参りまし

た。特にその中でも中居賢司客員教授(歯

学部口腔医学講座関連医学分野)のご指

導の下で行った、64チャンネル胎児心磁

計および187チャンネル高分解心電計

による胎児自律神経活動の分析および妊

娠・産褥経過中における妊婦・褥婦への

心負荷の解析研究は、国内は元より国際

的にも高評価を頂きました。今後はこれ

ら研究に加え、家系図自作成ソフトの

開発、遺伝情報回付に関する研究を進め

て参りたいと存じます。

各種出生前診断は、周産期医学の分野に

おいて重要な役割を担っているわけであ

りますが、その診断前後には臨床遺伝学的

に特別な配慮や対応が必要となつて参り

ます。これらに対応する医療行為として、

「遺伝カウンセリング」があります。この

「遺伝カウンセリング」を行うには、医師

であれば臨床遺伝専門医の資格取得と非

医師である認定遺伝カウンセラーの配置、

さらに最低でも一時間は診療時間を要す

るため、専門診療部門の設置が必要とされ

ております。私は当初産婦人科特殊外来

として「遺伝カウンセリング」を行って参

りましたが、周産期分野以外からの相談

依頼や相談件数の増加により、次第に現状

での診療実施が困難となつて参りました。

そこで当時附属病院院長であった小林誠一

郎教授(現医学部長)にご相談申し上げ

たところ、先生をはじめとする各方面のご

高配により、平成二十三年七月一日付で、私

を特任教授および診療部長として、医学部

には「臨床遺伝学講座、附属病院には「臨

床遺伝科」を新設させていただきました。

他医科系大学に於いては、旧制帝大といえ

どもこのような充実した遺伝医療体制を

なかなか整えることが出来ないでいるの

が現状です。大学当局の先見性あるご理

解に対して感謝の言葉が尽きません。

本学科は定員三名の非常に小さな所帯

ではあります。昨年四月には現附属病

院長である酒井明夫教授のご高配により、

待望の認定遺伝カウンセラー一名を学科

メンバーに加え、さらなる診療体制の充

実化を図ることが出来ております。周産

期分野では、新型非侵襲的母体胎児染

色体検査(NIPT)の第一期実施可能施設

(全国で十五施設)の一つとして認定を受

けることができ、日本でのスタートと同

時に岩手においても開始することが出来

ました。NIPT実施施設は現在全国で五十

施設になっておりますが、ニーズに十分

対応できていないのが現状です。因みに

東北では現時点でも当科を含め二医療機

関でしか実施することが出来ません。従つ

て当科には東北地方全域は元より、予約

をとるのが困難である首都圏からも検査

希望者が来院されております。羊水・絨

毛検査に関しては、杉山徹教授をはじめ

とする産婦人科学講座のご協力の下、遺

伝カウンセリングに引き続き当科が実

施しております。これも全国の他の遺伝

診療部門ではなかなか実現出来ないこと

であり、クライアントとの信頼関係を築

く上でかなり有用であります。

周産期分野以外では、家族性腫瘍、先

天性難聴、先天性代謝疾患、先天性筋神

経疾患等の遺伝カウンセリング、遺伝子

検査受注を行っております。これらの実

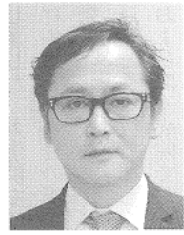
施に関しては、当科だけでは無論不可能

であり、関連各講座との緊密な連携の元、

私事、これからも岩手医科大学の発展のため微力を尽くして職責を全うする所存でございますので、主陵会の先生方に於かれましては、より一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

平成二十七年四月一日付



歯学部口腔保健育成学講座歯科矯正学分野

教授 佐藤 和朗

主陵会の先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

この度私は、前任の三浦廣行教授の後任として平成二十七年四月一日付けを持ちまして、歯学部口腔保健育成学講座歯科矯正学分野教授を拝命いたしました。歯科医学教育や歯科医療を取り巻く状況が厳しさを増す中で、岩手医科大学の歯科矯正学分野三代目教授として、責務の重さに身の引き締まる思いでございます。改めて伝統ある岩手医科大学の一員として、より一層尽力する所存でございますので、尚一層のご指導・鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

私は、平成二年三月に日本大学歯学部歯学科を卒業し、直ちに岩手医科大学大学院歯学研究科に入学いたしました。初代の故石川富士郎教授のもと歯科矯正学を専攻し、平成六年三月に同博士課程を修了し博士(歯学)の学位を取得した後、歯科矯正学講座現口腔保健育成学講座歯科矯正学分野)の副手として矯正歯科専門の歯科医師として一歩を踏み出しました。平成六年四月に歯学部副手任用となつてから、諸先輩方のご指導の下、矯正歯科治療を専門として研修をしていく事となりましたが、当時私自身が将来、歯科医師として何ができるかを模索した時代で

もありました。そのような中で、歯科矯正学講座で行われていたDuchenne型筋ジストロフィー病患者の調査の協力施設であった、青森県国立療養所岩木病院(現国立療養所青森病院)に一般歯科診療支援で三年ほど通った経験が、一生の仕事として歯科矯正学に携わることを決断する契機の一つになったように思います。療養所で出会う重度心身障害の患者さん達の多くは、不正咬合の症状を有しております。そのような患者さんにもいつか力になれる矯正歯科医師になろうという思いで研鑽を積み重ねてきました。そして単に歯並びや噛み合わせの異常を治療するのが矯正歯科治療の役割ではなく、広範囲な咬合異常に対応できる歯科医師を自己の将来像としてきました。平成十年から歯科矯正学講座の教授に就任された前任の三浦廣行教授は、「臨床に真摯に向かい合う姿勢が、教育、研究の基盤となる」ことを教室の基本指針としてその薫陶を受けながら、顎変形症、顔面外傷、先天異常と不正咬合の原因が異なる多くの患者さんの治療では、領域を超えた連携の中で矯正歯科治療を担当し、歯科医師として多くのことを学ばせて頂きました。このような経験から私は、現代の矯正歯科治療の担う役割、特に教育病院である大学付

属病院の矯正歯科が果たす役割を考えた場合、単に審美回復を目的とした歯科治療の側面だけではなく、成長発育期から成人期、高齢期に至るまで広範囲な年齢層の患者さんの様々な不正咬合とそれに伴う疾患に対応できる歯科医師を提供し、大学はそれができる歯科医師を育成することが切要であると考えております。

一方、研究に於きましては、大学院時代に各人固有の咀嚼のパターンが咀嚼筋機能と顎顔面形態の特徴にどのように影響するかを電気生理学的について検討する研究から開始し、その後は主に歯科矯正学における機能と形態の関連性に関した臨床研究テーマを主として行ってきました。その他咀嚼筋のエネルギー代謝に関する研究、下顎位の違いが全身運動に与える影響に関する研究、先天疾患に起因する不正咬合に関する研究、矯正材料に関する理工学的な研究、矯正治療中の疼痛抑制に関する研究、顎顔面の三次元的計測に関する研究など多岐にわたったテーマに取り組む機会に恵まれました。近年は、睡眠医療科の先生方と睡眠時無呼吸症候群患者の歯科的治療法に関する共同研究にも取り組んでおります。

そして教育では、歯科矯正学に関する教育に加え、平成二十三年五月からスタートした「歯学部改革プロジェクト」に於いて、歯学教育部門長の重責を担わせて頂いております。歯科医学教育を取り巻く厳しい現状に対応し、本学でのより良い教育を目指し、歯学教育部門長の立場として学部カリキュラムの改革および充実に手をかけ、更に講座を跨いだチューターおよびディレクターを統括する立場から、学部教育の実践的コーディネーター

として尽力しております。

このように私は今まで本学の学部や講座の垣根を取り払った連携の中で教育、臨床、研究それぞれのフィールドで多くの職務を行う機会を与えて頂きました。その中で出会えた同門、学内外の諸先生方、スタッフの皆様、学生さん、患者さんから多くのことを学び、そしてその方々から背中を押して頂けたことが私の大きな財産であると思っております。私は本学の生え抜きの自負を持って、私が受けたご恩返しの意味も含めてこれからの責務にあたりたい所存であります。

最後になりますが、我が国の人口減少や少子高齢社会化の状況は、他の先進国と比べてそのスピードが非常に早く、将来に対する大きな懸念材料となっております。この状況は医療にパラダイムシフトを要求し、私たち歯科医学教育に携わる立場では、私どもが受けなかった教育をこれからの若い世代に提示しなければなりません。難題は山積みですが、私のこれからの課題として若い医療人、学生さんを鼓舞し、共に未来の歯科医療の充実に貢献できるような教育、臨床、研究を目指していきたいと思っております。

浅学非才の身ではございますが、岩手の地で現在までの二十五年間、一貫して本学において歯科矯正学の仕事に専従して参りました。今後も「誠の人間の育成」を指針とし、岩手医科大学の発展、後進の指導、地域医療への貢献のため微力ながら一意専心努力していく所存でございます。何卒主陵会の諸先生方のご指導とご支援を謹んでお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

教授就任のご挨拶

平成二十七年四月一日付



歯学部口腔医学講座関連医学分野

教授 千葉 俊 美

圭陵会の先生方におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

この度私は平成二十七年四月一日付をもちまして、歯学部口腔医学講座関連医学分野教授を拜命致しました。大変光栄でございますとともに、その責任の重さをひしひしと感じ、改めて身の引き締まる思いでございます。責務を果たすべく精一杯努力して参る所存でございますので、ご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。

私は盛岡市出身で、昭和六十三年に本学医学部を卒業後、佐藤俊一教授(現名誉学長)の内科学第一講座に入局致しました。大学院では実験大腸炎における癌発生過程の細胞動態に関する研究を行い、日本消化器病学会で優秀演題賞を受賞致しました。本学附属病院および関連病院で消化器疾患の診療に従事し、平成五年には本学救急センター助手として一年間、緊急内視鏡検査、急性腹痛および腹部外傷の診

断治療などの研鑽を積み、さらに脳血管疾患、虚血性心疾患の初期治療や中毒疾患の血液浄化療法などに対応し、臨床医として総合内科医としての基礎

を作ることができたと考えております。平成九年には米国メイヨークリニックに二年三カ月間の留学する機会を頂き、消化管運動機能障害に関する研究を行って参りました。私は主として消化管シンチグラフィを用いた消化管運動と通過時間の研究を行っておりましたが、同じ研究室に所属する各国からの研究者とともに、基礎医学および臨床医学の観点から消化管運動の機序などについて日々議論し、研究に真摯に取り組み姿勢を持った多くの研究者を間近に見ることができ、そして、Phillips教授から最後のFellowとして

学問のみならず多くのことを教えて頂きましたことは、現在の糧となっております。帰国後、平成十二年から本学内科学第一講座専門医員、平成十七年に同講

師、平成二十一年には内科学講座消化器・肝臓内科学分野准教授として、鈴木一幸教授(現名誉教授)のもと機能性消化管疾患、薬剤起因性上部消化管傷害および炎症性腸疾患など幅広く診療および研究に従事し続けることができました。特に、機能性消化管疾患のうち、過敏性腸症候群は器質的疾患を認めないにもかかわらず、便通異常や慢性的な腹部不快感や腹痛を伴う腹部症状が出現することで生活の質を低下させる疾患で、発症機序および病態には消化管運動機能異常とともに知覚過敏および精神心理的異常が関与しているとされていますが、その真の原因は未だ解明されておりません。さらに、

成委員の重責を担わせて頂きました。さらに、原因不明で難治性疾患である炎症性腸疾患の診療も担当し、比較的若年者に発症する疾患であることから、病気の特異性をいかに説明し理解してもらおうことを常々考え、同世代とともに遜色ない社会生活を送ることができるよう、治療のみならず心理的な配慮も行うように務めて参りました。同時に、学生教育として最終学年である六年生の個人指導を担当し、学業成績のみならず将来の医師像など自分の目標を立てることで、勉学により集中することができるような指導を行う時期もあり、私にとりまして多くのことを学ぶ良い機会となりました。

脳腸相関の概念が提唱され、脳と消化器の機能的関連も言われており、この様な知見から、機能性消化管疾患の病態解明と治療方針の確立が望まれており、私は現在まで過敏性腸症候群および機能性ディスペプシアを対象として、消化管シンチグラフィおよびX線非通過マーカーを用いて消化管通過時間を測定し、消化管内圧測定検査を用いて消化管運動機能の研究を続けております。また、低用量アスピリンを含む非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)と上部消化管傷害の関係

を調査し、その仕事を学会論文発表したことが契機となり、ガイドライン作

問題がより注目され、医科歯科連携における摂食嚥下などの機能評価についてもさらに重要視されていくものと考えます。今後もぜひとも私が今まで経験および勉強し積み上げてきた事柄を十二分に引き出し、教育、研究、診療に役立てて続けて参りたいと考えます。そして、ここ岩手医科大学から世界に目を向けることができるような学生を、一人でも多く輩出する教育を心掛けて参るとともに、本学のさらなる発展のため、圭陵会の諸先生方のご助言ご支援を賜りますようお願い申し上げます。就任のご挨拶とさせていただきます。

教授就任のご挨拶

平成二十七年四月一日付

薬学部機能生化学講座

教授 中西真弓



主陵会の先生方におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび平成二十七年四月一日付をもちまして、薬学部機能生化学講座の教授を拝命いたしました。歴史と伝統のある岩手医科大学において講座を主宰させていただけることは、大変に光栄なことでありますと同時に、重責に身の引きまわる思いであります。私は、平成十九年に薬学部の開設に伴い本学に赴任いたしました。医歯薬の三学部と附属病院が揃う充実した環境で、教育と研究に取組む機会を与えていただきましたことは、誠に恵まれておりました。これまでご指導ご鞭撻いただいた主陵会の先生方に心より感謝申し上げますとともに、今後とも「高配を賜りますようお願い申し上げます。」

私は、平成元年東京大学薬学部を卒業し、同大学院薬学系研究科 微生物薬品化学教室の名取俊二先生の指導を仰ぎました。生命とは何だろうという疑問を胸に、修士および博士課程を通して、生体防御と形態形成に関わる昆虫レクチンの遺伝子発現誘導機構を研究し、新規の転写因子が、DNAの構造を変化させるこ

とで転写活性を制御するというユニークな機構を明らかにしました。

卒業後は、癌研究会癌研究所の小池克郎先生のもとで、ウイルスによる肝細胞癌の研究に着手しました。B型肝炎を経て肝硬変、肝細胞癌と進む過程では、B型肝炎ウイルスDNAのヒトゲノムDNAへの組み込みが第一段階です。私は、宿主の転写因子であるWT1が、ウイルスDNAの組換えやヒトゲノムDNAへの組み込みに関与することを示し、ウイルスDNAの組み込み機構の一端を解明しました。

米国UCSF心臓血管研究部門 (Shamir R. Coughlin教授) に留学時には、トロンビンによる血小板凝集における情報伝達機構を研究しました。トロンビン受容体 PAR1 (Protease-Activated Receptor 1) は、トロンビンにより末端部分が切断されて活性化し情報が伝達されます。私は、マウスの血小板には、ファミリーである PAR3/PAR4が発現しており、トロンビンの刺激により二つの受容体が協同的に活性化することを実証しました。この結果を報告した論文は、数多くの学術論文に引用されており、この分野の発展に貢献できたと考えております。

平成十六年より微生物化学研究センター二井特別研究室に参画し、後に機能生化学講座の初代教授となられる二井将光先生のご指導のもと、プロトンポンプ ATPase (F-ATPase、V-ATPase) の研究を始めました。F-ATPaseは、プロトン濃度勾配を利用してATPを合成するATP合成酵素で、V-ATPaseは、ATPの加水分解で得られるエネルギーを利用してプロトンを輸送し、酸性環境を形成する酵素です。私は、超高速カメラを備えた暗視野レーザー顕微鏡により、酵素一分子の動きを観察する実験系を確立し、F-ATPaseの作動機構を詳細に解析しました。

平成十九年に本学薬学部 機能生化学講座に准教授として赴任した後も、プロトンポンプの研究を継続し、この酵素を阻害するポリフェノール類が、大腸菌や歯周病菌に対して抗菌効果を示すことを見出しました。食品に含まれる成分であるポリフェノール類は安全性が高く、抗菌剤の開発へつながることが期待されます。

さらに、骨代謝におけるV-ATPaseの機能を研究しています。破骨細胞への分化に伴いリソソームが形質膜と融合することで、リソソームのV-ATPaseが形質膜へ輸送されます。骨吸収には、輸送された本酵素による細胞外酸性化が必要で、私は、遺伝子欠損マウス等を用いて、小胞輸送の調節因子が本酵素を介してリソソームにリクルートされ、リソソームが形質膜へ移動することを見出しました。これは、V-ATPaseと小胞輸送を関連付ける興味深い知見であり、骨代謝異常症の新規治療法の開発に発展することが期待されます。今後も、医学部、歯学部、

薬学部の諸先生方のご協力を仰ぎながら、臨床応用につながる基礎研究を目指してまいります。

「生命」に関心を持って研究を始めて四半世紀になりますが、知れば知るほど生命の仕組みの精緻さに魅了されます。私は教育を通して、生命の素晴らしさを学生にも伝えたいと思っています。それは、自分も他者も慈しまれるべき大切な存在であるという認識、すなわち、医療人として最も大切な姿勢を培うことになると考えています。

薬学部において六年制が施行され、薬剤師に対する社会の期待はますます高まっております。文部科学省は、新しい薬学教育モデルコアカリキュラムの実施に際し、「基礎的な科学力」「研究能力」「教育能力」「自己研鑽」を含む十の基本資質を卒業時に備えているべきであるとしましたが、これらの能力を充分に身につけることは容易ではありません。薬剤師への期待は、国家試験問題の難度にも反映されています。一方で、薬局や病院における薬剤師不足は深刻であり、こうした状況の中、大学は、社会に貢献できる優秀な医療人を輩出することが要求されています。私は、基礎科学の教育と薬学研究の指導を通じて、問題解決能力を修得させ、主体的に取組むことのできる薬剤師を育てるべく努力してまいります。

もとより微力ではございますが、社会のニーズに応え、本学のますますの発展に貢献すべく教育と研究に尽力する所存でございます。主陵会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

平成二十七年四月一日付

教養教育センター人間科学科哲学分野



教授 遠藤 寿一

主陵会の先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

この度、平成二十七年四月一日付けをもちまして、岩手医科大学教養教育センター人間科学科哲学分野の教授を拝命いたしました。哲学分野は、その前身である教養部哲学科が昭和四十年に開設されておりますので、今年で五十年の歴史を数えます。この間、初代の川村安太郎先生、二代目の石渡隆司先生のお二人が教授職を歴任され、医大における哲学教育と研究の伝統を創始し、その発展に尽力されてきました。今回、その席に連なる教授職をになうことになり、重責をひしと感じております。

私は静岡県富士宮市に生まれ、昭和五十二年に東北大学文学部哲学科に入學しました。大学時代の指導教官は石鳥谷町出身の滝浦静雄先生でした。厳しい指導をされる一方、情に厚い先生で、お酒も強く、酒席を通じて哲学のみならず人の生き方についてもいろいろと教えられました。滝浦先生は退官

後、岩手県立大学盛岡短期大学部学長をつとめられたので、ご存じの方もおられるかと思えます。先生のご専門はフエノメノロジ（現象学）でしたが、一八世紀ドイツの哲学者カントの演習もされていて、私はそこに参加したことがきっかけで、カント哲学に関心を持ち、昭和五十六年に大学院に進学しました。石渡隆司先生と面識を持つようになったのもこの時代です。当時、先生はラテン語の非常勤講師として盛岡から東北大に外向されており、語学の苦手な私は先生から古典語のいろはを教授していただきました。私はその後、日本学術振興会特別研究員(DC)を経て、平成九年に国立秋田工業高等専門学校の人文学系の助教として秋田に赴任することになりました。高専では、高校から短大までの年齢幅を持つ学生を相手に三年間教育指導を行いました。平成十二年に、縁あって、岩手医大教養部の助教に採用され、盛岡の地に居を移すことになりました。教養部は平成十九年の薬学部新設に伴い、矢巾キャンパス共通

教育センターに改編され、さらに昨年四月、新たに組織された全学教育推進機構に所属する教養教育センターとして新たな一歩を踏み出すことになりました。概略このような経緯を経て、現在、私はセンター所属の教員として主に一般教育の講義を担当しております。岩手医大の一般教育の環境は、ご存じのように、矢巾移転以来大きく変化しました。学生数は教養部時代の医歯二学部百六十人から、医歯薬三学部三百八十人に増え、少子化の影響から、以前にも増して教員のサポートが必要な学生の割合が増えてきています。また、国際基準に準じた医学教育を行なう必要から、一般教育の内容にも新たな方向が求められています。哲学関係で言えば、例えば、日本医学教育学会の医学教育分野別評価基準案では、生命・医療倫理学は医歯薬分野教育プログラムの必須項目となっておりますし、分析および批判的思考を含む、科学的方法の原則に関する教育の充実も求められています。このように、岩手医大においては、多くの学生に、その能力にあわせた消化しやすい形で、生命倫理と論理的思考に関する教育を行なうことが要請されています。これらの要請に対応するために、哲学分野では数年前から生命倫理学やクリティカルシンキング科目を開講しました。また、昨年三月に哲学分野が作成協力した「岩手医科大学生命倫理規範」は昨年度から三学部のシラバスに掲載されるようになりました。とはいえ、学生教

育にはまだ工夫の余地が多く残されており、看護学部の設置も具体化してきましたので、新たな局面に対応するための改善策を今後とも考えていきたいと思っております。

生命倫理の問題は医療系大学の教育問題にとどまらず、バイオ技術の進展、高齢化社会といった現象と結びついて、近年社会的な関心事となり、学術の世界でも分野を超えて注目されています。哲学の世界も例外ではなく、カントやヘーゲルの研究者が生命倫理の領域に越境して議論を展開しています。例えば、私の学生時代、著名なヘーゲル研究者として東北大で教鞭をとられていた加藤尚武先生は、転出先の千葉大時代に日本における生命倫理学の基盤を整備し、現在も東大で生命倫理学の研究者育成に尽力されています。また石渡隆司先生は岩手医大在任中に日本医学哲学倫理学会を創設され、日本の医療倫理学の発展に大きな足跡を残されました。私自身も最近カント研究の延長線上で、人間の生と死の境界をどこに置くべきかという生命倫理の基本領域に関心を持っており、その成果はまだわずかですが、少しずつ歩みを進めていければと思います。

最後になりましたが、私は、恵まれた岩手医大の教育および研究環境を通じて、将来ある医療人の育成と哲学・生命倫理の研究に今後とも貢献していきたいと考えております。主陵会の先生方には引き続きご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。